

営農技術情報

— 畑作（秋まき小麦） —

平成30年 8月27日発行

上川農業改良普及センター名寄支所 TEL01654-2-4524
JA道北なよろ TEL01655-3-2521
JA道北なよろ営農センター TEL01654-3-4307

～ は種時期に応じた適切な、は種作業を！ ～

1 ほ場の選定について

「野良生え」によるコンタミを防ぐために、そばや春まき小麦ほ場の後作は、できるだけ避けるようにして下さい。やむを得ず作付けする場合は、除草剤処理や抜き取りを徹底し、「野良生え」がほ場に残らないようにしましょう。

また、連作により雪腐病や立枯病等の病害が増加しますので、極力、連作を避けましょう。

2 排水対策の実施

排水改善を図ることで、①停滞水および雪腐病等による株の枯死を防止、②融雪後のほ場の乾燥および地温上昇を早め、越冬後の生育を促進、③追肥の効果を高めて過剰施肥の回避等につながります。

は種前に心土破碎、サブソイラ等による排水対策を実施しましょう。

3 は種時期とは種量について

道北地域における「きたほなみ」の越冬前の生育の目標は、「葉数 5.7～6.4 葉、莖数 1,000 本/㎡」で、積算温度では「520～640℃」を確保することが目安となります。近年の気象変化も加味すると、名寄地域における「きたほなみ」のは種適期は9月9日～15日です。

は種時期の天候不順や他の作業との競合回避のため、は種を前倒しにするケースが増えています。早まきをする場合は、は種量を減らしますが、出芽不良等で欠株が発生するおそれがあり、減収程度も大きくなります。は種床を丁寧に造成した上で、正確には種を行なって下さい。また、砕土が悪い場合や粘質が強いほ場では出芽率が低下しますので、極端には種量を減らさないで下さい。

表1 は種時期とは種量の目安(越冬前莖数 1,000 本/㎡程度が目標！)

は種期	早まき 9月1～8日	は種適期 9月9～15日	晚まき 9月16～22日
は種量	5～7kg/10a (120～140粒/㎡)	7～9kg/10a (140～170粒/㎡)	9～12kg/10a (170～250粒/㎡)

※種子千粒重 40g、出芽率 90%で算出。

※山間地や傾斜地、砕土整地が悪い場合は、は種量を目安から 10～20%程度増やす。

4 は種深度

は種深度は2.5～3cm程度が適正です。「深まき」(4cm以上)は、発芽不良や二段根の発生だけでなく、分けつの発生も悪くなります(図1)。は種深度を確認するとともに、鎮圧も実施しましょう。特に、土壤水分が多いときや、砕土が細かくなると、は種機の自重による「沈み込み」が大きくなりやすいです。注意して下さい。

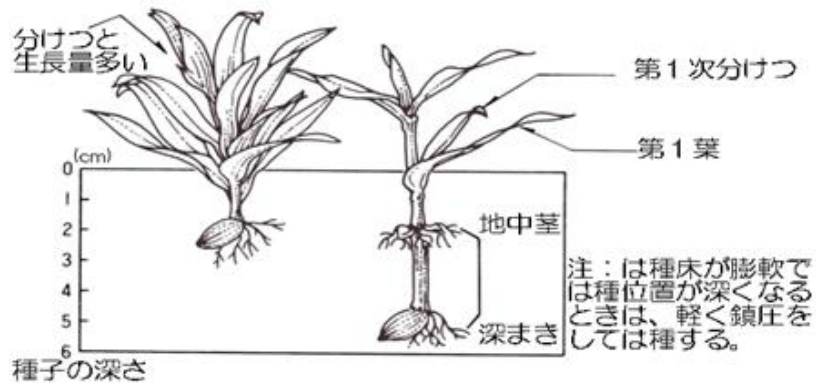


図1 種子の深さと生育の関係 (北海道作物管理全書より)

5 pHの矯正および施肥(基肥)について

pHが低いと養分の吸収が悪くなり、特に、越冬後の生育が抑制されるおそれがあります。予めpHが5.5～6.0程度になるように矯正しましょう。

基肥窒素量は4kg/10aを基本としますが、地力や前作を考慮した上で増減するようにして下さい。なお、銅の欠乏症が懸念されるほ場では、銅入りの肥料銘柄を使用しましょう。

表2 秋まき小麦の施肥(基肥)事例

銘柄	施肥量	施用量 (kg/10a)		
		窒素	リン酸	カリ
BB121Cu※	40kg/10a	4.0	8.0	4.0
BB121	40kg/10a	4.0	8.0	4.0
BB082	40kg/10a	4.0	7.2	4.8
BB086	40kg/10a	4.0	7.2	2.4

※銅入り肥料銘柄

6 雑草対策

イネ科の雑草(スズメノカタビラ等)やイヌカミツレ・レッドトップなど難防除雑草に対しては、春以降の茎葉処理では、十分な効果が得られないおそれがあります。雑草が多いほ場では、は種後の土壤処理を必ず実施しましょう。除草剤を散布する際は、使用基準範囲内の高い薬量で散布するようにしましょう。

表3 秋まき小麦の除草剤例(登録内容は平成30年8月21日時点)

薬剤名	使用時期	使用量 (ml/10a)	使用回数	対象雑草
ガレース乳剤	は種後～出芽前 (雑草発生前)	200～250	1回	1年生雑草
	小麦出芽後～出芽揃期 (雑草発生前)	150～250		
	小麦1～3葉期 (雑草発生前～発生始)	100～150		
ムギレンジャー乳剤	は種後～出芽前 (雑草発生前)	300～600	1回	1年生雑草
ガルシアフロアブル	は種後～出芽前 (雑草発生前)	150～250	1回	1年生雑草
	出芽直前～小麦3葉期 (雑草発生前～発生始)	100～200		
エコパートフロアブル	小麦2～4葉期 (広葉雑草2～4葉期)	50～100	2回	1年生広葉雑草

7 「大豆間作栽培」について

大豆の連作回避および秋まき小麦のは種遅れを回避する目的で、「大豆間作栽培」(大豆畦間ばらまき栽培)という方法があります。大豆の立毛中に小麦の種子を散播する方法のため、は種前の耕起作業が不要で、省力的です。

ただし、は種後の土壌処理剤は使用できませんので、雑草の多いほ場での実施は避けるようにして下さい。また、雪腐病の被害を受けやすいため、排水性の劣るほ場を避けるとともに、越冬前は必ず雪腐病の防除を行うようにして下さい。

表4 秋まき小麦「大豆間作栽培」の実施方法(目安)

項目	実施方法	作業上の留意点
は種時期	8月末～9月上旬 大豆の黄変始め(落葉前)	出芽向上のため、降雨前が望ましい 大豆の落葉が覆土代わりとなるため 時機を逃さないようにする
は種量	15～18k/10a	当地域での出芽状況および越冬性を 考慮すると、道指導参考の255粒/ ㎡(9.5～10.5kg/10a)より多い方が 生育・収量が安定する傾向
は種方法	ブロードキャスター ミスト機 等	ブロードキャスターの場合は種子 の飛散状況を確認する
施肥 (越冬前)	基肥として大豆落葉後に標準量を 施用する(窒素成分で4kg/10a)	泥炭土等、地力が高いほ場では省略 可能

農薬の安全使用について

- 農薬散布に当たり、近接する作物へ飛散しないように十分注意しましょう！
- 農薬は必ずラベルを読み、使用量・時期・回数を確認し適正に使用しましょ